

大関啓子先生のご退職に寄せて

英文学科主任

佐々木 真理

大関啓子先生は、実践女子学園中学校・高等学校をご卒業されたのち、実践女子大学文学部英文学科そして実践女子大学大学院文学研究科にて、英文学科の基礎を築かれた本間久雄博士と小倉皐博士の教えを受けられました。その後、実践女子学園中学校高等学校で教鞭をとられ、1985年に本学英文学科にご着任、36年の長きにわたり英文学科の教育にご尽力されました。実践女子学園でのご教歴は、中高での期間をふくめると、実に43年間ということになります。

その間、数多くの学生の指導にあたられ、大関ゼミの卒業生の総数は合計で433名となります。教育者として、大関先生は常日頃より大変熱心に、大切に学生をご指導されていらっしゃいました。そのようなお姿は、大関先生の研究室に何枚も飾られている、卒業生たちとの思い出のお写真から窺うことができます。何より、2019年5月に開催された、実践女子学園創立120周年を記念する祝賀会やJ-フェスにおいて、大関先生が息を継ぐ暇もないほど、次から次へと卒業生の方々に声をかけられ、みな声を弾ませながら歓談されていた様子が忘れられません。卒業後どれだけの月日が流れようとも、あのよう学生から慕われるお姿は、同じ教育に携わる者として一つの指針となっております。

また、教育に関して、大関先生から教わり、私が大切にしているお言葉があります。それは、私がまだ本学英文学科に着任して間もない頃でした。まだまだ未熟であった私によく声をかけてくださっていた大関先生が、あ

る日、「佐々木先生、私はね、授業のたびに必ず何か学生に小テストなどの課題を出すようにしているんですよ。学生は、そうやって手をかければかけるほど、ちゃんと応えてくれますからね」と何気なくおっしゃったのです。若い頃、学生と真摯に向き合うことに臆病であった私にとって、まさににはっと頬を叩かれたような瞬間でした。その後、折に触れて、この言葉を、まさに大関先生の“passing words”として思い出しております。

そして、何より、研究者として、大関先生は優れたご業績を残されています。研究の専門を異とする私には、その真価を正確に推し量ることは到底およびませんが、僭越ながらまとめさせていただきますと、中世英文学、特にロマンス文学についての研究を長年にわたってたゆまず続けてこられました。ご発表された数々の論文は、2008年に『中世英国ロマンス文学—ケルト逍遙—』(実践女子学園学術・教育研究叢書16)としてまとめられています。同時に、本学の創立者である下田歌子についてもご研究を発表されており、日本の女子教育に下田歌子が残した功績や、下田歌子と英国などを中心とする海外の女子教育との関わりについて、貴重な資料を基に詳細な考証を行っておられます。

生涯学習センター長や図書館長といった数々の要職に就かれ、ご多忙を極める中で、研究者として、教育者として、このようなすばらしいお働きを残されてきた大関先生ですが、そのご活躍の軸となっているのが、やはり、母校への愛、実践女子学園の伝統への強い誇りと将来への責任感ではないかと拝察いたします。英文学科は2014年に創設90周年を迎えましたが、時の流れにあわせて、さまざまに変化することも余儀なくされてきました。大関先生はその中であって、時代の変化に柔軟に対応し、さらに良き英文学科の未来へ向かっての協力を惜しむことはありませんでしたが、同時に、英文学科の過去の伝統を後代に残そうと折に触れてご尽力くださいました。その一つが、昨年度公開された、本間久雄文庫「メーソン・ライブラリー」のデジタルアーカイブです。本間文庫は、1981年に本学に寄贈された本間久雄博士の旧所蔵中、英国世紀末文学・文化関係の洋書を基盤とし、その後、直筆書簡や初版本・稀覯本などが加わったものですが、特に「メーソ

ン・ライブラリー」と称される全17集の切抜帖は、極めて貴重な特殊資料です。この資料を平成30年度教学重点事業によりカラーデジタル化し、広く世界へ向けて発信するという、大変なお仕事を大関先生は推進されました。そして、このアーカイブは世界中のワイルド研究者から注目を浴びましたが、これがきっかけとなって、大関先生とフランスに在住のマーリン・ホランド氏との交流が始まりました。ホランド氏はオスカー・ワイルドの唯一の孫であり、ワイルドの研究者として知られています。ホランド氏の父は、オスカー・ワイルドの遺児であり、本間久雄先生にワイルドの遺髪を贈られるなどの親交があった、ヴィヴィアン・ホランドです。そのマーリン・ホランド氏が日本のワイルド研究者たち、そして大関先生と親しくやり取りをするようになった経緯については、マーリン・ホランド氏がわざわざこの大関先生退職記念号に寄せてくださった文章をぜひお読みください。研究者としての本間久雄先生の熱意が結んだ本学とワイルドとの不思議な縁、そして、その縁を将来へとつないでいこうとする大関先生のお姿が垣間見えるのではないかと思います。

大関先生が、本間先生を始めとする錚々たる方々の、学問と教育に対する志を大切に受け継ぎ、それを後に残る者に引き継ごうとする思いを、非力ではありますが敬意を持って次の世代へ渡せるように精進していくことが、大関先生へのご恩返しになるのではと、再び僭越ではありますが、思いを新たにいたしております。

いつも美味しいお菓子をくださったり楽しい日常のひとこまをお話しくださった大関先生と、これからキャンパスでお会いできなくなることに、とても淋しい思いも感じております。どうぞ大関先生、いつまでもお元気で過ごしてくださいように。そして、温かく英文学科をお見守りください。